

可想体（ノウメナ）・先験的对象・物自体

——カントにおける物自体の概念の一考察——

高 山 淳 司

(一)

カントが批判期全体を通じて、物自体の実在について語っていることは、否定しがたい事実である。⁽¹⁾一方、物自体の概念、すなわち現象の根柢に存し、現象の認識されえない根柢をなすと規定され、時にはわれわれの心を触発すると語られる物自体の概念が、多くの問題を含んでいることもまたたしかである。そこでカント自身、批判期においては、かかる基本的な意味における物自体の実在を主張しているのではないという解釈が生じてくる。

物自体とは経験の全体という理念を意味するとか、先験的对象という概念の導入により物自体の概念は止揚されたとかいう主張がその代表例であろう。しかし物自体という用語が保持されているにもかかわらず、「カントの真意は、上述のごとき基本的意味における物自体の存在を否定するにある」という解釈が成立しうるためには、その解釈はカント自身の発言——物自体に対する否定的な、あるいは少なくとも懐疑的な発言によって裏付けられてい

なければなるまい。われわれは、特に純粹理性批判においてかかる裏付けをなすと主張されて来た章句を検討し、それが果して真に裏付けたりうるかどうかを確かめてみたいと思う。そのための手がかりとしてまず、ヴィンデルバントの「カントの物自体の説の諸相について」⁽²⁾を取り上げてみよう。

この書によれば、カントの物自体の学説の展開は四つの時期に区別される。第一期は一七七〇年の就職論文の立場で、純粹概念によって物自体の世界そのものを認識することができるというものである。第二期は七〇年代はじめの立場で、認識活動と独立に物自体が存在し、感性を触発して感覚を作る。しかし純粹直観も純粹概念も物自体へは拡張されえない。物自体を認識することはできないと主張する。第三期は七〇年代後半ごろの立場で、物自体は考えることすらできない、それは絶対的な *Unding* であり、存在しないとす。第四期は一七八〇年ごろ以後の立場であり、第三期で否定された物自体の仮定を道徳の基礎の上に再建した時期であると主張する。

ところでヴィンデルバントによれば、物自体を全く否定する第三期こそ、形而上学のおよび心理的に無前提な認識の方法を示すものとして、すべての独断論から清められた真の批判主義の立場をあらわすものである。もしそうであれば、ヴィンデルバントはカントの著作中から何としてもこの立場を示す箇所を発見しなければならない筈である。ところが彼の達しえた結論は次のようなものであった——純粹理性批判には第二期と第四期の立場が述べられている。それ以外の著作にも第三期の思想は提示されていない。ただし純粹理性批判の第一版の「先験的演繹論、現象体と可想体の区分の章、パラロギスムスの章」には、この思想が断片的に残存していた。特にA255の「対象を現象体と可想体に分ち、世界を感性界と悟性界とに区分することは、全く許されぬことである」という一文を、カントは幸にも見落して、第二版の改訂にあっても残しておいたのであった——。

このようにヴィンデルバントの結論は、物自体を否定する第三期の思想は、どの著作にも主題的・体系的な形

では存在せず、ただ純粹理性批判の第一版のところどころに断片的に残存するにすぎないVというものであって、本稿冒頭の、物自体の实在が批判期全体を通じて主張されているというテーゼを逆の形で裏付けていることになるが、彼が指摘する第一版のこれらの個所こそ、カント自身が物自体を否定したと主張する解釈者たちに支柱を与えて来た主要な個所である。われわれもこれらの個所をそれぞれ検討して行くことにしよう。

(一)

純粹理性批判の先驗的分析論の成果の一つは、範疇は經驗的にしか使用しえず、超經驗なものに対するその先驗的使用は全く認められないということであった。したがって超越的な物自体が現象の根柢に存して現象の原因をなすという主張は、この成果に反するものと考えられよう。分析論の最後に位置する現象体と可想体の章は、分析論のこの成果を強調して、物自体に対し最も否定的な個所（少なくとも一見したところでは）となっているといえよう。

さてこの章は第二版においてかなりの改訂を受けたが、まず第一版によれば、対象として範疇の統一にしたがって思惟される限りでの現象は現象体とよばれ、これに対して、単に悟性の対象であり、しかも知的直観の対象として与えられる物を想定すれば、それは可想体とよばれると定義されている（A 248 f.）。

第二版では、われわれの直観様式を捨象して、われわれの感性的直観の客観とならない物を、消極的な意味での可想体と名づけ、知的直観の客観を積極的な意味での可想体と名づけている（B 307）。したがって第一版で単に可想体とよばれているものは、この分類では積極的な意味での可想体をあらわすことになる。A 254—260（B 309—315）の両版共通の部分は、まず第一版で積極的な意味での可想体に関する議論として書かれたことに注意せねば

ならない。

もともと第一版にも、用語上は明確に定義されていなくても、内容的には、消極的な意味での可想体の概念も存在している。たとえば、「そこでここから可想体の概念が生じる。しかしそれは決して積極的ではなく、また何らかの物についての限定的認識でもなく、単に或るもの一般についての思考を意味するにすぎない。この思考において私は、感性的直観のあらゆる形式を捨象するのである」(A252)。

しかしこの消極的な可想体の概念の提示にすぐ引きつづいて、積極的な意味での可想体を前面に押し出す次のような主張がなされている。「しかし可想体があらゆる現象体から区別されるべき真の対象を意味するためには、私が私の思考を感性的直観のあらゆる条件から解放するだけでは十分ではない。私はなおその上に、この感性的直観とは別種の直観で、可想体というような対象がその下に与えられうるような直観を想定する理由を有しなければならぬ。けだしもしそうでなければ、私の思考は矛盾は含まないにしてもやはり空虚だからである」(A252)。もともと可想体は語源的に、純粹悟性でとらえられうる限りでの対象を指し、何らかの意味で認識可能でなければならぬとまず考えられる。この章で積極的な意味での可想体についての議論が大きな比重を占めている理由はそこにあるだろう。

さてこの章には可想体に対する否定的言明が多く述べられているが、それは積極・消極いずれの意味における可想体に関して述べられているのかが問われねばならない。まず積極的な意味における可想体に対する懐疑的章句は、多く挙げる事ができる。最も断定的な箇所をあげると、「それゆえ……対象を現象体と可想体とに分ち、世界を感性界と悟性界とに分類することは、積極的意味では、全く許されぬことである。」(A255=B311)

* 「積極的意味では」は第二版における付加である。しかし上述のように第一版で何の限定もなく可想体といえは、積極的意味

におけるそれを指すから、両版は内容的には、いずれも積極的意味での可想体を否定していることになる。なおこれが、ヴ
インデルバントが「カントの幸運な見落し」と称した個所である。

しかし消極的な意味での可想体に対してはカントは必ずしも懐疑的ではない。「感性の論は、消極的意味における
可想体の論であり」(B307)、「感性体にはもろん悟性体が対応する」(B308)。「現象にはそれ自身現象ならざる
或るものが対応しなければならぬ」(A251)。そしてこの悟性体は「消極的な意味での可想体と解されねばなら
ない」(B309)し、またこの現象ならざるあるものの対応という観念から「可想体の概念が生じるが、それは何ら
積極的な概念ではない」(A252)。

ところでこの消極的な意味での可想体は、物自体と同一視されている。「消極的意味における可想体の論、すな
わち悟性がこのようにわれわれの直観様式に関係することなしに、したがって単に現象としてでなく、物自体とし
て思考せざるをえないような物についての教説……」(B307)。ここで消極的意味における可想体といっても、認
識不可能という意味で消極的なのであり、その存在について消極的、否定的な主張が行われるということではもち
ろまないのである。

さらにこの章で、可想体についてそれは蓋然的であり、しかも感性の不遜を制限するための限界概念にすぎない
という読み方がなされ、したがって物自体の实在が蓋然的にすぎず、さらにそれは实在物ではなく、概念にすぎない
という主張がしばしばなされている。ここでカントが蓋然的にすぎないと述べているのはいずれの意味での可想
体についてなのか。ルールは、蓋然的と称されているのは、積極的な意味における可想体だけであると主張する¹³⁾。

たしかにほとんどの個所では、蓋然的という述語は積極的な意味における可想体に関して使用されている。この
事実はおそらくルールのおり、カント自身大ていの場合、消極的意味における可想体||物自体は蓋然的ではな

く、その実在は不可疑であると考えていることを示すものであろう。しかしたとえばこの章の最後の段落を見ると、「概念が可能的経験に關係するものでなくて物自体（可想体）に適用されるべきものであるとすれば、そういう人（範疇の先験的使用を断念しかねる人）は、これらの総合的諸命題をどこから得ようというのであろうか、……このようにして元来、純粋な単に英知的な対象というような概念は、これが適用せられるべき一切の原則を全く欠いている。……それにもかかわらずこのような対象のために余地を空けてくれるのが蓋然的思考である」（A259 || B315）。

ここで考察されている可想体が積極的の意味における可想体のみを指すとは決して断定できないであらう。むしろ消極的意味における可想体（||物自体）の蓋然性が主張されていると考えられよう（同様に反省概念の多義性の章の A288 || B345 で懷疑的に語られている可想体も消極的意味におけるものであろう）。ところでカントによればある概念が蓋然的であるとは、(一)それが無矛盾であり、(二)他の与えられた認識と関連してそれを限界づける概念であり、(三)しかし自己の客観的実在性は何ら認識されえないようなものである（A254 || B310）。たとえば翼ある馬の概念は無矛盾であり、それを思惟することは可能である。しかしそれは(二)の特徴を欠いているから、恣意的に構成された概念であり、それを思惟することには何の意義もありえない。蓋然的な概念は、かかる恣意的に捏造された概念とすべく対立する意義を有している。そこでたとえ A259 で、リールの主張に反して消極的意味での可想体すなわち物自体が蓋然的であると言明されているのだから、かかる蓋然的思考によって物自体のために「余地」が空けられているのである。この余地は、空虚な空間のように、経験の原則を制限するのに役立つのみで、経験の領域外の認識の客観を含んでいないものではない。しかしカントが理論理性に求めるものは、物自体ないし英知的対象に対するかかる空虚な余地の確保であり、理論理性は物自体を単に蓋然的なものとしてでも実践理性に手渡

せば、実践理性はそれに客観的実在性を与えることになるのである。⁽⁴⁾したがってカントはここでは物自体の蓋然性さえ示せばよいわけであり、一貫して物自体の実在を信じつつも、或る局面ではこのような表現を行ったと考えることも可能であるだろう。

最後に可想体は限界概念にすぎないという主張について考察すると、ペーテンも指摘するように、「⁽⁵⁾可想体の概念は、単に感性の不遜を制限するための限界概念であり、ただ消極的に使用されるものにすぎない。(傍点筆者)」（A255—B310 f.）と記されているのであって、可想体は独立の実在物でなく単なる概念であると主張されているのではない。（先験的対象であれば、それは概念——対象一般の概念——であるとも云いえようが）。この章では他にも、「悟性体という不明確な概念を、われわれが悟性によって何らかの仕方で認識することのできる存在体という明確な概念と考える誤まり……（傍点筆者）」（B382）というように、概念と概念の呼応が正確に表現されている。可想体そのものは、決して単なる限界概念ではないのである。

積極的な意味での可想体について、カントが懐疑的・否定的であることを最も明らかに示すのは、A256—B312である。そこでは、積極の意味での可想体を把えるべき直観的悟性は、それ自身一個の蓋然体であり、われわれはそのようなものの可能性については、少しの表象も持ちえないとされている。この積極の意味での可想体を懷疑する個所のすぐ後に、「しかし悟性はいかなる範疇をもってしても、物自体を認識できず、したがって物自体については、これをただ不可知なるものの名のもとに思惟するのみなのである」という文が続いている。これは物自体についてカントが決して否定的でないことを、そして物自体は認識することはできないが思惟することは可能であるという批判期を通じての一般的主張が、この最も懐疑的な章にも、主音としては維持されていることを示すものである。

反省概念の多義性の章の A286—289 (B342—346) も現象体と可想体の章と同じ主題を論じている。そこでも非感性的直観の対象という概念は蓋然的であるという主張がなされている。ただしそこではかかる対象が、消極的意味での可想体と呼ばれている (A286—B342)。これは、われわれが認識できないという意味で消極的とよばれているのであり、現象体と可想体の章での積極的意味における可想体を指しているのであるから、蓋然的という述語は主として積極的意味での可想体について適用されているという先の主張はこの章にもあてはまるわけである。結局物自体について最も否定的と称されるこの二章⁽⁶⁾においてすら、消極的意味での可想体の実在についてカントは必ずしも懐疑的ではない。特に物自体という語が使われている場合には、その存在は自明として前提されているという印象が強く与えられるのである。

(三)

純粹理性批判で先験的対象、あるいは先験的客観という句が現われるのは、感性論、第一版の先験的演繹、第二の類推、第一版の現象体と可想体、反省概念の多義性、第一版のパラロギスムス、二律背反、理想、弁証論への付録の各章である。⁽⁷⁾このうち第一版の演繹および現象体と可想体の章に出てくるものは、それ以外の個所にあらわれ、るものとは異なる意味をもつと考えられる。(今後これらをそれぞれ先験的対象(A)、先験的対象(B)で表示する)。先験的対象、先験的客観の両語は、それぞれが(A)の意味にも(B)の意味にも用いられているから、カントはこの両語を全く同義語とみなしていると考えて差支えないであろう。先験的対象(B)は物自体と同義であるが、(A)は後述のように、統覚の統一の相関者として、主観の本性に根ざしている。

右のような区別に賛成しない解釈者ももとより存在する。先験的対象はすべて物自体と同一であると見る者(た

たとえばケンプ・スミス)、先験的対象の概念の導入によって、物自体の概念は廃棄されたとみる者——この見解をとる者は、先験的対象(A)(B)をある程度区別するかしないかは別として、(B)を(少くとも(B)の一部を適宜)(A)に引きつけて解釈することが多い。ケイヤード、コーヘンなどはこれに属するであろう。(A)(B)を明確に区別し、一方を他に解消せず、それぞれに固有の意義を認める者には、ペートンなどがある。

なおカントの用語との関連を明確にしないままに先験的対象という語を用いる者も少くない。たとえばヘリングは、現象として現われる物を、それ自体としての側面において見る場合、それを先験的対象とよび、一方物自体は超絶的であってわれわれに現象することはないと考える。しかしながらカント自身、物自体についての最も重要な言明個所とみなされる BXXVI において、現象と物自体は同じ一つの対象を二つの観点から考えたものにすぎない、物自体が現象するのであると主張しているのであるから、ヘリングはことさらに用語を変更したにすぎない。さらにヘリングにおいては、先験的対象(A)がもつ統覚との関係は全く触れられていないので、カントの用語との対応は全く不明確である。

さて先験的対象は(A)をも含めてすべて物自体であるとするケンプ・スミスの主張は、ペートンの厳しい批判(9)をつまでもなく、全くの誤りである。スミス自身、自己の主張の理由を述べていないので、なぜこのような主張をするのか理解に苦しむものであり、かかる主張は吟味する必要もないものと考えられる。われわれは先験的対象(A)と(B)とを明確に区別するだけでなく、この区別を最後まで保持するものであり、先験的対象の概念によって物自体を廃棄しようとする第二種の解釈者のように、ある程度この区別を認めておきながら、後にひそかにこれを解消するやり方にも反対するものである。

ところで先験的対象(A)はおよそ次のように導入されている——表象の対象はわれわれの認識に対応するものであ

り、それ自身は表象でありえない。しかし表象の外には表象と対立せしめうる何ものも存しない。表象の対象といえはまず物自体が考えられるであろうが、物自体はわれわれにとってはいわば無であるから、かかる対応する対象ではありえない。ところが対象はわれわれの認識がออกมาせに限定されることを防ぐ或るものであり、諸認識は一つの対象と関係することによって対象の概念を構成するところの統一をもたねばならぬ。かかる意味での対象を先験的对象(A)とよぶとすると、それは表象ではなく、したがって現象でなく、したがって現象的对象でありえず、非経験的な対象である。この先験的对象が、われわれの表象に对象との関係、客観としての統一を与えるが、先験的对象が与えるこの必然的統一は、表象の多様の総合における意識の形式的統一以外ではありえない。すなわち先験的对象が与える対象性は統覚の必然的総合的統一に由来する。先験的对象は統覚の統一の対象面における相関者である——(A104—110, A250)。

それ以外の個所で先験的对象という場合、多くは現象の根拠、その英知的原因などと説明され、時には魂、神などを指すこともあるが、すべて物自体(時には広義の)を意味すると解される。特にA366では、物自体と先験的对象とが、あらわに等置されている。

なぜこの二つの異なるものが、同じ先験的对象の名で呼ばれるのか。ともに認識の対象となりえないからというだけでは、もちろん不十分であろう。表象のもつ対象との必然的關係は、最初には素朴に物自体∥先験的对象に由来すると考えられるだろう。しかし上述のようなA104—110におけるカントの分析の結果、物自体はわれわれにとつていわば無であるから、この関係を与えるものとはなりえない。この関係を支えるものは、悟性に根ざす対象一般の概念である。そこで物自体∥先験的对象の等号を取はずして、後者にこの新たな意義を与えたものであると考えられよう。その結果として現象に対象性ないし客観性を与えるものは、物自体でなく先験的对象(A)であるという

ことになったが、それによって物自体の概念は不要のものとして廃棄されたわけではない。現象としての対象を認識する際に必要な悟性の総合的統一の機能と物自体とは、関係がないことが示されたのみである。

*さらに先験的对象(A)は現象的对象の先天的一般的な性格の根源ではあるが、個々の具体的対象の有する経験的特殊的性格の源泉は物自体であつて、先験的对象(A)はこの機能を果しえないと考えられる。¹⁰⁰

もし物自体の概念が廃棄されたのであれば、第二版で先験的对象(A)という句を含む個所が克明に削除され、逆に先験的对象(B)だけが残されていることは理解しがたいであろう。

この削除の理由は何であろうか。周知のようにケンプ・スマスは、先験的对象という句の出現する章句はそれだけですでに早期草稿に由来することを示すものであり、この思想は前批判期的であると見た。¹⁰¹ヴォルフは時間的な早期・後期は云々すべきでないとするが、論理的にはやはり早い段階のものであると主張する。範疇への言及がこうした章句には存しないというのがその主な理由である。¹⁰²このように多くの論者(特にパッチ・ワーク説の信奉者)によって、先験的对象(A)を含む章句の前ないし反批判性が主張された。ヴォルフが指摘するように、範疇への言及を欠くことは、たしかにかかる章句の早期起源を示唆するであろう。しかしそれらの個所の思想が、成熟した批判期の思想と相反しているとはわれわれには考えられない。むしろ第一版の演繹における当該個所は、表象に対象としての統一を与えるものは物自体でなく、統覚の統一の相關者としての先験的对象であるというまさしく批判的な思想を述べている。カントの削除は先験的对象(A)という思想の前批判期性によるものではあるまい。カントはこの思想の表現は撤回したが、思想内容は第二版においても保持しているからである。すなわち第二版の演繹に多出する対象一般(あるいは客観一般)という術語は、第一版の先験的对象(A)とほぼ同じ内容を持っている。(ただし対象一般においては範疇との関係が説かれている。これはすでにA93(=B126)に現われている対象一般の語

についてもそうである¹³⁾。してみればカントの削除は、先験的対象の語が(A)(B)二義をもつという状態が不都合であり、混乱を招くと考えたからであると解すべきであろう。

われわれは第一版の先験的演繹および現象体と可想体の章以外における先験的対象という句は、すべて物自体と同義であると予め主張した。

問題は先験的対象という術語に(A)(B)以外の第三の意味、あるいは(A)(B)の二義を連絡し統一するような意味が見出されはしないかということである。第一版のパラロギスムの章から、最もしばしば問題にされる箇所を抜き出して検討してみよう。「……これらの外的現象の基礎をなし、われわれの感官を触発して、空間・物質・形体等の表象をえさせるようなあるもの、このあるものは可想体として(あるいはもっと適切には、先験的対象として)見られるものであるが、このあるものはまた同時に思考の主体であるかも知れない。もっともそれがわれわれの外的感官を触発する仕方を通してわれわれのうちものは、表象・意志等の直観ではなくて、単に空間とその諸規定のみなのであるが」(A358)。

*ここで「可想体として(あるいはもっと適切には、先験的対象として)」と述べられているのは、上述のように第一版で可想体という場合には認識可能性が含意されて来るので、外的現象の認識できない基体に対しては先験的対象の語の方が適切であると見たのである。

さて外的現象の基体が思考の主体でもあるという言明は、多くの解釈者を困惑させて来た。この *das Subjekt des Denkens* を「思考の主題」と訳す試みなどはこの困惑の一表現であろう。ケンプ・スミスはここに *our* を挿入して *the subject of our thinking* と訳している¹⁴⁾。もし私の思考の主体だということになれば、先験的対象は自我自体でもある、外的物体の基体たる先験的対象が、同時に私自身の基体でもあるという解釈を生ぜしめること

になろう。外的物体の基体という物自体的な、先験的対象(B)的なものが、思考の主体という先験的対象(A)と関連したものと等置されることになるので、物自体は実は先験的対象(A)であるという主張に道を開く結果となろう。

あるいは先験的対象(A)と(B)とが根柢において同一であるという思想の表白とも受けとられるであろう。この場合、先験的対象(B)はほとんど規定をもたないのに反し、(A)は演繹論や現象体と可想体の章に見られるごとき多くの規定を有しているのであるから、(B)が(A)に引きつけられ吸収される形となる。そこで先験的対象(A)が、外的現象の基体でもあり、またわれわれの感官を触発して外的表象を得させる√ということになる。先験的対象(A)の触発とは異様な表現であるが、代表的な解釈によれば、「先験的主観の統一が、換言すれば先験的対象(A)が、経験の可能性の制約を成立せしめたとき、必然的に対象への超越が行なわれ、経験的対象を空間と時間が受容する地平が成立することになる。このような地平の形成によってのみ、外なるものは経験において主観を触発しうるのである」とされる。

しかし以上の解釈は、外的現象の基体が私の思考の主体であるという読み方にもとずいている。しかしもしそうなら、カントも単に「思考の主体である」とは述べず、「私の思考の主体である」とか「自我である」とかと書く筈であろう。上記の文を素直に読むならば、「われわれに物体として現われているものが、それ自体としてみれば、(私以外の)思考の主体であるかも知れない」と解せられるのではあるまいか。(エルトマンも「このあるもの自身の思考」とこの個所に注を入れている)。すなわち、この引用文を含む *§39-39* の個所は、合理的心理学の「魂と物質とは異質的である」という主張の論駁をめざしている。現象としてはたしかに両者は異なっている。一は内的感官の対象であり、他は外的感官の対象である。一は単純であり、他は複合的である。しかし両者の知られざる基体について云えば、あるいは同種的であるかも知れないとこの個所は論じているのである。そして「われわ

れの外的感官に関して延長性が帰せられるところの実体に、それ自体としては、この実体自身の内的感官によって意識を伴って表象されるところの思考が存していることを十分想定することができる（傍点筆者）（A359）のごとき叙述は、A358の「思考の主体」が、その外的現象の基体自身の思考の主体、私以外の思考の主体を意味していることをあいまいさなしに語っている。したがって先にあげたA358の章句は、「外的現象の基礎に存する先験的対象(B)すなわち物自体（物自体という表現がこの部分の各所—A357, 359, 360—に現われていることに注目せよ）が——それが自体として何であるかはわれわれは知りえず、したがってそれが思考する存在者である可能性も十分考えられる——われわれの外的感官を触発して空間的諸表象をわれわれに与える」という平明な思想を述べていると解すべきである。

この思考の主体という句で、カントは特に人間を指していると考えられる。すなわち「外的現象としては、〔身体として〕延長しているものが……それ自身においては……考える主体である」（A360）と述べられている。しかし「われわれが、思惟する存在体としての私を物質と比較するのではなく、われわれが物質とよぶ外的現象の根柢に存する英知体と比較するならば、……魂はこの英知体と何らかの点で内的に区別されると主張することもできない。」(a. a. O.)に見られるように、物質という語がしばしば使用されていることは、無機的な物質も、それ自体としては思考ないし意識を有するものでありうるという单子論的見解を示すものではあるまいか。カントは私的見解としては、もろもろの物自体の作りなす世界を单子論的に解していたと考えられよう。彼は現象界を单子論的に見ることに對してのみ反對しているのである。¹⁶⁾ ハイムゼートもこの個所を、物理的単子は意識ある単子と程度の上でのみ異なるという单子論的形而上学と結びつけている。¹⁷⁾ これを要するにA358の一文は、先験的対象(B)すなわち物自体を主観方向に解消するものではなく、むしろ英知的世界における多くの自体的存在者の共存というイメージ

をカントが持っていたことを示唆する個所とみなしうるのではあるまいか。

(四)

以上によって、可想体についてのカントの叙述も、先験的对象に関する理論も、全体としてみれば、物自体に対するカントの否定的見解を示すものでないこと、したがって彼が全批判期を通じて、物自体の实在について語ることを止めなかったという場合、それは基本的な意味における物自体の实在の主張が維持されたのであり、物自体という語の意義が他に転化したのではないことを、少くとも最も問題とされる個所については示すことが出来たと思う。同時にヴィンデルバントが、カントの物自体を否定する第三期の思想の残存を認めたとあつた三つの個所が、必ずしも物自体の否定を主張していないことをも幾らかは示し得たであろう。カントは純粹理性批判全体を通じて、物自体の实在に對する信念を一貫して保持した。そして二三、物自体の概念は蓋然的であるとも解しうる発言が存するにしても、大局的に見れば、至る所でこの信念を明瞭に表明し主張した。

ところでカントがこのように物自体の实在を主張する場合、現象するものがなくて現象が存するのは不合理であるからという理由づけがしばしばなされている。³⁸これは物自体の前提にもとづいて対象を現象とみなし、次いで現象という語の意義から、それには物自体が対応するという推論を行ったもの³⁹ではありえない。それは余りにも明白な循環である。純粹理性批判の成立にとって決定的要因をなした二律背反論において、この可見的世界のみが存在するとすれば矛盾に陥ることが示された。そこからこの世界の不完全性、不完結性があらわにされ、それ以外の世界が何らかの意味で存在しなければならぬことが帰結する。一方因果律などを先天的原則として確保せんとする彼の要求は、空間・時間・範疇を主観的とみなすことを必然たらしめたが、経験の対象の形式面における主観性は、

経験の対象すなわち現象と物自体との対置をおのずから含意する。「感性の論は消極的な意味における可想体の論となる」(B307)。このような考量に支えられながら、彼は特に自由が矛盾でないことを示して道徳の地位を守るために現象と物自体の相対の説を採ったのであらう(BXXVI ff)。したがってアディクネスが Kant und das Ding an sich において繰りかえし力説した「物自体の存在はカントの体験による信念なのであって、証明されない前提であり、推論による帰結ではない」という主張は、カントが物自体の实在の証明を厳密には、また主題的には行なっていないという限りでは正当であるが、カントはもともと实在論的な体験を強く有していて、現象を見るととき全く無媒介的に物自体の息吹きを感じたという意味であってはなるまい。

こうした物自体について、カントはしばしば現象の根拠、現象の原因であると語っている。もちろん原因といっても、図式化された範疇として時間的継起を含む概念をカントが考えているわけではない。「悟性は対象自体を思惟するが、それを単に先驗的客観として思惟するのであり、この先驗的客観は現象の原因であって(したがってそれ自身は現象ではない)、量としても、实在性としても、実体等々としても思惟されないものである。(なぜなら量、实在性、実体等の概念はつねに、ある対象を想定するための感性的形式を必要とするから)(傍点筆者)」(A 288=B344)。この文が明示するように、カントが物自体は現象の原因であるという場合も、彼は原因の概念を図式化された範疇との意識的な対立において使用しているのであり、現象の根拠 Grund という時間と無関係で、純粹範疇を表示するのによりふさわしい語と内容的には同じものをさしている。物自体の触発について語られる場合も、この触発について何ら限定された認識をわれわれが有し得ない以上、現象ないし感覚の根拠という内容空虚な概念を多く出ないであらう。

カントは先驗的弁証論において、世界秩序の根拠を含む世界と別個の存在体について論じ、(一)それは疑いもなく

存在する。(二)しかしこの存在体について実在性、必然性、実体等の範疇をもちいて認識することは全く出来ない。(三)ただし経験の対象との類推によってこの存在体を考えることは許されるといふ明確な主張を行なった (A 659 f. = B 723 f.)。

ここで広義の物自体たる存在者について語られた(二)(三)の主張は、狭義の物自体に対してもあてはまると考えられるであろう。狭義の物自体に対して、原因、数多性、現実的存在 (Dasein) 等の範疇が用いられているのは、(三)の適用であると云えよう。しかしこの類推による言明といえども、物自体に対するわれわれの認識不可能性をいさなかも変えるものではない。狭義の物自体に対する限定的な知はいかなる意味でも存しえず、物自体は全く無規定なものに止まる。こうした無規定性のゆえに、純粹理性批判の内部でも、叙述の進行につれて狭義の物自体は主題として取扱われることが乏しくなって背景に退き、実践理性の対象として充実した規定性が約束される神・魂などの存在者が前面に出て来ることになる。しかしこのことはカントが狭義の物自体を否定し廃棄したことを意味するのではない。むしろ一七八一年以後の諸著作は、純粹理性批判以上に断定的に物自体について——時にはその触発について——留保なく語っている。

「物自体はカントによって、批判期のすべての著作において本質的区別なしに一樣に堅持されているのである。」²⁰⁾

- (1) E. Adickes: Kant und das Ding an sich, 1924, S. 4.
- (2) W. Windelband: Über die verschiedenen Phasen der Kantischen Lehre von Ding an sich, 1877.
淡野安太郎訳、カント物自体説の諸相について、一九二八年。
- (3) A. Riehl: Der Philosophische Kritizismus, Bd. 1, 3. Aufl., 1924, S. 564.
- (4) KdrV, BXXVI ff. 並に BXXXVI Anm.
- (5) H. J. Paton: Kants Metaphysic of Experience, vol. 2, 3rd impression, 1961, p. 457.

- (9) cf. Adickes : S. 95—153.
- (7) KdrV, A46 (B63) ; A109, 109, 109; A191 (B236) ; A250, 250, 251, 251, 251, 253 ; A277 (B333), A288 (B344) ; A 358, 361, 366, 372, 372, 379, 390, 393, 394; A478 (B506), A478 Ann. (B506 Ann.), A494 (B522), A494 (B522), A495 (B523), A538 (B566), A538 (B567), A540 (B568), A545 (B573), A557 (B585), A565 (B593) ; A 613 (B641) ; A679 (B707), A698 (B726).
- (8) H. Herring : Das Problem der Affektion bei Kant, Kantstudien Ergänzungshefte 67, 1953.
- (6) Paton : vol 1. p. 421—423.
- (5) リーネギューマンは、他者の心の機能を強調する。カントは Riehl : S. 558 f. Paton : I p. 167n. 3.
- (4) N. K. Smith : A Commentary to Kant's 'Critique of Pure Reason,' 2nd ed., 1923, p. 204 ff.
- (3) R. P. Wolff : Kant's Theory of Mental Activity, 1963, p. 102 ff.
- (2) 高坂正顕、理想社版著作集第三巻、一九六五年、六七—七二ページ（対象一般の節）参照。
- (1) Smith : p. 460. ただし、史密斯自身はそれ以上議論を展開していない。
- (5) 今谷澄之助、カントの純粹理性批判研究、一九六四年、三二—三三頁。
- (4) z. B. Kant : Akademie Ausgabe, VIII 248 f.
- (3) H. Heimsoeth : Transzendendental Dialektik, Teil 1. 1966, S. 117.
- (2) KdrV. BXXXVI, A 251 usw.
- (1) マンントネン、カントの『説書』五八—五九頁。
- (0) G. Martin : Immanuel Kant, 3. Aufl., 1960, S. 208.

* 純粹理性批判の引用文は、大部分高峯一愚訳（河出書房・世界の大思想10）に依った。